

研究論文

鍵盤楽器を習得する多人数学生のグループ分け，組織化と指導

平松昌子

—How to Organize Students in Basic Piano Instruction—

HIRAMATSU Shoko

はじめに

音楽を保育者養成課程で学んでいる学生に、豊かな音楽教育を提供する事はとても大切な事である。

幼児教育の中においても、音楽は重要な意味を持っている事が明白である。また、幼稚園や保育園現場での音楽は、幼児教育とさまざまな繋がりを持っている。よって、幼児に提供すべき音楽教育は、しばしば大人対象の音楽教育とは異なる性質をもっている。

これらの事を強調したかのように平成2年の文部省は、初めて、「幼稚園教育要領」で幼児対象の音楽教育を図画工作と統合し、「表現」の領域として位置付けた（註1）。以来、幼児の音楽教育に対してのこの方向付けは、変更されずに現在まで継続されている。筆者が以前に論じたように、この「表現」と言う概念は、幼児対象の音楽教育の場合、その「複合的」特徴を重視している（註2）。

本学の幼児保育学科の学生は保育者養成の課

程で、音楽の教育を受けている。「幼児音楽」という科目があり、1年目の学生全員に、鍵盤楽器演奏の技術を伝達する事がこの科目の重要な教育目標である。

一方では学生に提供される鍵盤楽器の教育は、具体的、技術的な教育でなければならない。その中で「個人指導」のような教育までが求められている。しかし、他方で、多くの学生を指導する事は、効率の良い組織形態を必要としている。本学の以前の状況では、まず、入学時の学生の演奏力を把握し、それに応じた学生のグループ分けをする事等が、学期初めに行なわれていた。

ところが、最近では、本学においての「幼児音楽」の科目は、一層難しい環境の中に置かれている。

[1] 「幼児音楽」の科目のカリキュラム上の面積が減少している。そこで、授業の担当者はより限られた時間の中で学生に対応して、伝授しなければならない。

[2] 近年、入学段階から鍵盤楽器の演奏経験のある学生が、極端に少なくなってきた。

[3] 平成17年4月以来、本学科の入学者数の定員増が認可され、受講者が増加している。つまり、これまでより多くの学生が「幼児音楽」の科目で学んでいる。

この条件下で、以前のように新学期へ緩やかに入る余裕がなくなり、学期が始まると早々に授業を開始しなければならない。その為には、最初から、綿密なシステムを準備し、大勢の学生が複数担当者の指導の基で、効率良く学習できる仕組みを用意しなければならない。こういった新しいシステムは、個々の学生や指導者の力量が最大限に活かされるように計画されていなければならない。また、学生が増加し、教室やピアノ等の備品が不足する中で、これらの物を、最も合理的に使用する計画を編み出す必要があった。

そこで誕生した新しい組織形態は、従来のものより複雑になったのである。つまり、限られた条件の中で全体の効率を高める為には、より一層洗練された仕組みが求められていた。

尚、この新しい組織形態では、従来の場合より、強い教育的方向付けが現れている。例えば、以前に、学生の自主的練習の方向付けはそれほど明白になっていなかった。しかし、この新しい仕組みでは、組織形態そのものが、一定の教育的役割りを果たし始める。その教育的方向性が、限られた条件の中においても強く強調されている。

本稿ではこの新しい組織の骨子について描写し、その教育的役割りや保育者養成課程における機能について述べていきたい。

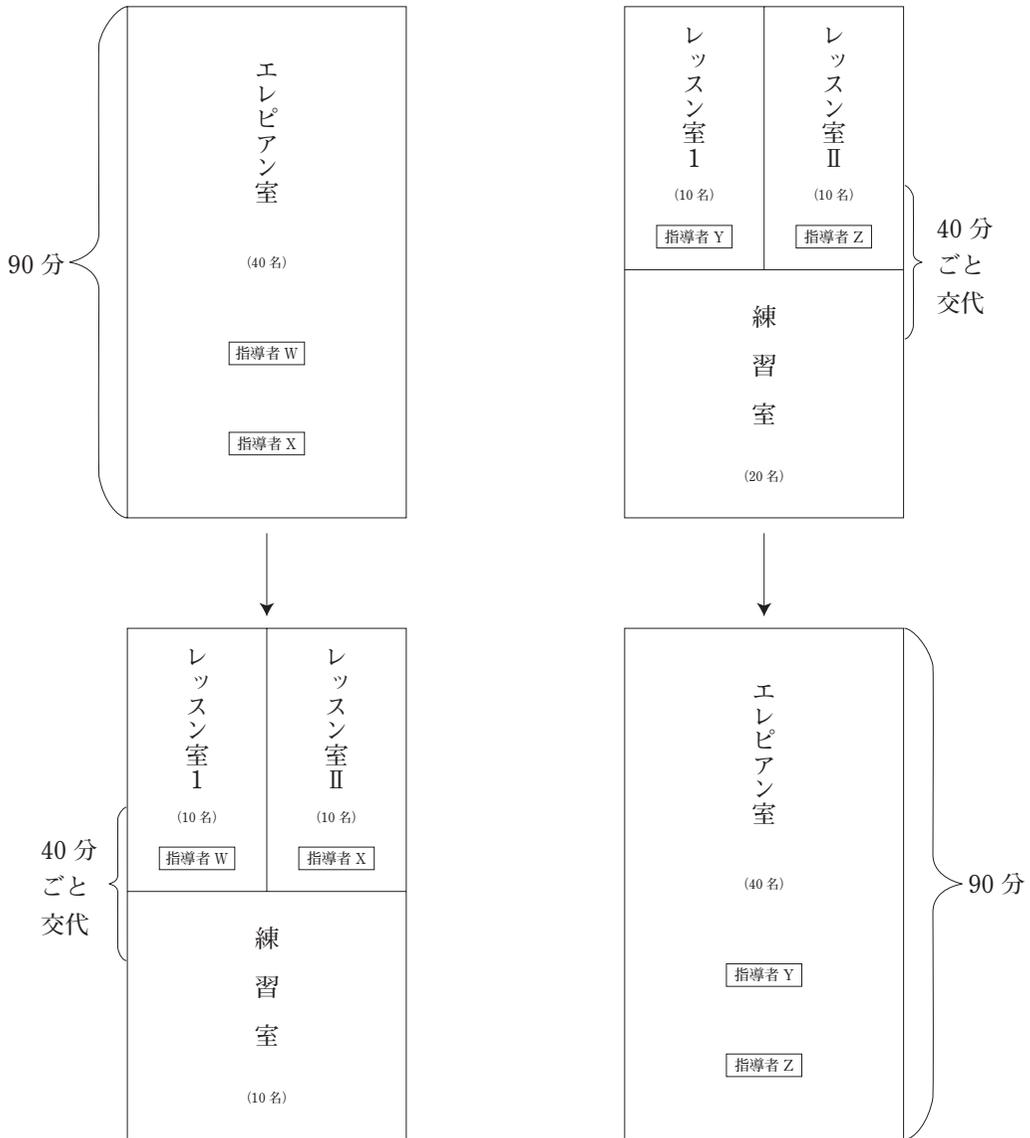
I 新しい仕組み (図を参照)

- ① 80名の学生が対象になっている事を考える(註3)。
- ② 2コマ(90分×2)のカリキュラム上の時間が与えられている。
- ③ 40名の学生はエレピアンを使って鍵盤楽器の学習をできる「エレピアン室」がある。その「エレピアン室」は全時間中、使用可能な状態になっている。
- ④ 総80名の学生が対象なので、その前半の40名がまず、90分の間「エレピアン室」を使用して学習をし、2名の指導者(WとX)はその指導を行なっている。その90分後に交代があり、残りの学生40名が「エレピアン室」に入室し、指導者(YとZ)の指導を受けながら、次の90分間の学習を進める(註4)。
- ⑤ 上記の④では、まず40名の学生が「エレピアン室」で授業を受けていた。90分後、他の40名が交代し、「エレピアン室」を使用し始めた。ところで、その裏時間をどのように活かす事ができるのだろうか。使用可能な教室と機材(ピアノ等)を前提にして、前半や後半の授業時間中「エレピアン室」を使えない40名の学生に、有意義な鍵盤楽器の教育を提供する必要があった。
- ⑥ 「エレピアン室」以外には、2つの「レッスン室」があり、そこには2台ずつのグランドピアノが備えられている。それ以外に、16の「練習室」があり、これらの小部屋のそれぞれには、アップライトピアノ1台がある。学生に実際のピアノに触れる機会を与える為には、この16の「練習室」やグランドピアノの2つの「レッスン室」を十分に活用していく必要があった。尚、これらの空間と機材を使い、学生たちのピアノ学習を効率良く組織する事が、この新しい企

画の最大の目標であった。しかしながら、上記の「エレピアン室」の場合と異なり、40名の学生がそのまま同時に、学習できる機材の条件が提供されていなかった。そこで、「エレピアン室」学習の裏の90分の授業時間それぞれを、40分前半と40分後半の時間に分割する必要がでてきた。

- ⑦ まず、グランドピアノの2つの「レッスン室」では、10名ずつの学生が学習している状況を想像して頂きたい。と言うことは、2つの「レッスン室」のそれぞれには、一人の担当者がある時点で、グランドピアノを使い、ひとりの学生に対して、個人指導を行なっている。他の8名の学生は、この状況を観察し、自分の出番を待っている。弾き歌いの時にはこれらの学生が、一緒に歌ったりする事もある。「レッスン室」には、2つのグランドピアノがあるので、もう一人の学生は2台目のグランドピアノの前に座り、精神的な落ち着きを得る為、準備態勢に入ろうとしている。このような条件下では、指導者が「レッスン室」内の10名の学生に対して、40分間対応している。その場合に40分の間、学生10名の一人につき、平均で4分程度の個人指導を行なう事ができる。
- ⑧ しかし、⑦の20名(10+10)の学生が2つの「レッスン室」で学習している時、もう一つ20名のグループが存在していた。この裏の20名は、まず、40分間「練習室」で自主的練習を行なってきた(註5)。40分が過ぎると、表の10+10名の学生は2つの「レッスン室」から「練習室」へ移行し始める。同時に、これまで「練習室」を使ってきた学生20名は、10名ずつになり、2つの「レッスン室」に入り、そこでの担当者の指導を受け始める。つまり、④の40名の学生が、90分間「エレピアン室」で授業を受け
- るのと同じ時間中、⑦⑧のプログラムが2つの「レッスン室」と「練習室」で進行している。
- ⑨ 最初の90分が過ぎると「エレピアン室」から出る40名の内、その学生の20名が、「練習室」へ入り練習を始めるが、残りの10+10名は「レッスン室」で担当者WとXから指導を受け始める(註6)。40分後に交代があり、「練習室」と「レッスン室」の20名ずつが入れ替わる。
- ⑩ システム全体を見れば、80名の学生の内、40名がまず、「エレピアン室」での授業を受ける。それと同時に、他の40名が40分の交代を挟んで20名ずつ「レッスン室」と「練習室」で学習をしている。最初の90分が過ぎると、これまで「エレピアン室」で学んできた40名が、20人ずつ「レッスン室」や「練習室」に入り、⑦⑧と同様に学習し始める。その反対に、最初の90分の間「レッスン室」と「練習室」で学習した学生は今度、「エレピアン室」において指導者YとZの90分授業を受け始める。

(図)



II 教育論の見地からみて

この新しい仕組みの中で、一つの「エレピアン室」、16の「練習室」や2つの「レッスン室」を効率良く使い、学生に均等な形態で学習の可能性を提供する事が目標になっていた。それと同時に、この条件の中で担当者4名の鍵盤楽器指導を教育として、最大限に活かす事が目的であった。

教育論や音楽教育論は、しばしば、この仕組みより単調な「1次元的な」授業形態内でイメージされている。しかし、詳しく観察すれば、実際の音楽教育やピアノ学習は、以前から複数の「パーツ」で形成されていた。

ここで描写した組織形態は、これらの「パーツ」を学習組織を通じて表したものである。このように、この「パーツ」の役割りは学習者から見て、一層強く意識されてくる。

- (a) 一つの例でいえば、「エレピアン室」での学習は単に鍵盤楽器の勉強ではなく、「レッスン室」と「練習室」におけるピアノ演奏を視野に入れた学習になっている。つまり、「エレピアン室」内の90分授業の身近な成果だけではなく、一層遠いところにある目標まで、学習者が意識する仕組みになっている。その際、学習の過程は断片的なものとしてだけでなく、方向性のもつプロセスとして想像されていく。
- (b) 「練習室」と「レッスン室」の関係を見れば、「エレピアン室」での勉強とその他の学習の場合と同様になっている。つまり、「練習室」における練習が、この仕組みでは、「レッスン室」での演奏発表を視野に入れたものでなければならない。
- (c) 「レッスン室」でのグランドピアノを使用した学習をみると、そこで出番を待っている学生8名は、ただ待っているだけではない。

演奏発表をしている者と一緒に歌がうたわれる事がある。また、この8名は相手の演奏発表を観察し、聴き手の立場からその演奏について分析している。その際、聞き手は演奏者の経験から学びとる事が少なくない。既に述べたが、2台目のグランドピアノの前に座り準備している一人の学生は、精神を統一し、イメージトレーニングを行なっている。その学生が第一ピアノの学生と一緒に演奏する事もあり得る。勿論、この一人の学生の準備は、次のスムーズな演奏交代をも可能にしている。

この見地から見て、「レッスン室」でのこれらの学習は、種々の部分（パーツ）を含んでいる。これらの「パーツ」がダイナミックな関係の中におかれている事までが明白である。つまり、学習者はこの学習をプロセスとして意識しなければならない。

- (d) この学習プロセスの中に、学生が緊張しなければならない場面とそうでない場合がある。学生は演奏者としてその両方を経験し、その間の移行をも経験している。これらの経験から、種々の演奏条件をイメージできる実力が生まれてくる。この中で学生の音楽演奏者としての対応力が高まる。
- (e) 20名の学生に対して、アップライトピアノが16台しかない。このことは明らかに設備の不足を意味していた。エレピアンを利用し、その不足部分を「補った」が、実際のアップライトピアノに触れる機会を均等に与える為に、20名の学生は交互に交代する事が必要になっていた。このような状況の中で、学生がお互いの事を考えながら対応しなければならない。個人指導が重要になるピアノ学習が、しばしば教える側と教わる側の関係だけとして想像されがちである。しかし、ここで描写した新しい組織形態の中では、学生同士の関係に焦点が当てられる事も少なくない。

(f) 総括していえば、音楽学習は演奏すること、鑑賞することや他の者の演奏発表を意識しながら、自分から行動する事で成り立っている。音楽学習のこの多様な性質を教育形態の幾つかのパーツで表現する事が、この度の仕組みの大切な点である。

(g) 教育論や多くの教育学は、教育者と非教育者だけに焦点を当てながら進められている。そうした場合には、教育場面や非教育者を取り巻く「環境的な」条件がしばしば無視されている。ところで、幼児音楽教育においては以前から、教育の場面設定や教育を取り巻く環境が重要な要素を含んでいた。言い換えれば、教壇と学生との単調な場面設定だけが想像されると、そこには無視される教育的要素がある。また、幼児音楽教育において、教育の場面設定が特に重要になってくる。保育者養成課程の中でも学生に、多少複雑な場面設定を経験させる事は、幼児教育の中の場面設定について学生にそれなりのヒントを与える事を意味している。

学生の教育を彩らせる事については異論がないだろう。しかしながら、限られた条件の中で、多少、複雑な組織をもって音楽教育を進める際、教育や教育者は却って新しい道を模索しなければならない。このような条件下では、新しい可能性までが発見される事が少くない。

(h) 平成2年に文部省が定めた幼稚園教育要領以来、幼児対象の音楽教育は、筆者の概念で言えば、一種の「ハイブリットな」タイプの教育として捉えられている。保育者養成課程の学生には、音楽の授業を通じてこれらの方向付けについて、それなりのイメージを提供すべきであろう。そこで、保育者養成課程までにハイブリットな教育を持ち込む事が、一つの方法となる。例えば、学生を対象とした音楽教育は、音楽劇を題材にする事が考え

られる(註7)。そうした場合にはこの教育そのものがハイブリットな性質を持ち始める。

ハイブリットな要素を保育者養成の音楽教育の中に持ち込む事が、音楽教育以外の事象まで学習者に意識させる事をも意味している。

しかしながら、本稿で描写した新しい仕組みは、そこまで従来の音楽教育の枠を超えていない。つまり、今回の新しい仕組みがハイブリットな方向性を含んでいない。にもかかわらず、これが「表現」の概念が設定した目標へ一歩近づこうとしていると言えよう。

(i) 教育理論の観点から見て、ここで描写した組織形態が倉橋惣三、城戸幡太郎等の教育論の延長線上においてイメージすべきものである(註2を参照)。同時にそれが、源流のプラグマティズムの考え方とも調和している。プラグマティズムの創業者C. S. パース(1839～1914)はヨーロッパの従来哲学より、科学を科学者たちに支えられる取り組みとしてイメージしていた(註8)。同様に、プラグマティズムの教育は「児童の生活経験を能動的に改造していく営み」や「問題解決へ導く仕組み」として(註9)想像されていた。

参考文献

註1 文部省：「幼稚園教育要領」大蔵省印刷局 1990

註2 平松昌子著：「幼児音楽教育をハイブリットな教育として捉えて」北海道文教短期大学研究紀要第28号、2005

註3 実際には約160名が対象者であったが、80名が月曜日に、他の約80名が金曜日に学習する授業形態がとられていた。ここではその片方だけについて記載している。

註4 「エレピアン室」での練習は個々の学生の学習になりがち。その中の「さまよい」を防ぐ為に、2名の指導者を配置している。

註5 「練習室」は16しかないが、20名の学生にはその16台のピアノが練習用に割り当てられている。不足している4台分の練習楽器として他の所にあるエレピアンで補っている。尚、均等化を図るために、月ごとにローテーションをし、どの学生にもアップライトピアノを利用する機会を提供している。つまり、4台分のアップライトピアノが不足しているが、エレピアン4台を使用し、ローテーションによってバランスをとっている。

註6 学生の間では「エレピアンを使った授業を先に受けたい」や「レッスン室+練習室が先のほうが良い」との見解があるので、公平な条件を提供するため、月ごとに全体のパタンをローテーションさせている。

註7 平松昌子著：「保育者養成課程における音楽イベントの教育的意義～本学の音楽フェスティバルを通して～」北海道文教短期大学研究紀要第25号，2001

註8 林達夫他著：哲学辞典，平凡社，1971 p. 1096, 1097, 1205, 1206

註9 林達夫他著：哲学辞典，平凡社，1971 p. 1206, 1207

Abstract

Basic piano instruction often is imagined as a transmission of skills from one teacher towards a few pupils. But in education of future nursery school instructors, efficient transmission of piano skills to large groups is required. For this purpose the paper introduces an organizational model where different learning groups mirror elements within the learning process : such elements become landmarks visible to the learner. As compared with conventional teaching, efficiency of instruction and equipment becomes increased.